

# 中国都市図の近代的転回

小島 泰雄

- I. 成都図モデル
- II. 成都図モデルの検証
- III. 転回の背景
- IV. 技術の伝統と近代
- V. 地図思想の転回

## I. 成都図モデル

「四川省城街道図」と題する成都を描いた都市図が2枚、伝えられている。1枚は光緒二十年(1894)に呉紹伯が刊行したもので(図1)、もう1枚はその翌年に楊維藩が刊行したものである(図2)<sup>1)</sup>。

呉紹伯の成都図は、地図表現として平面図と鳥瞰図が併用されていることが端的に示すように、伝統的な都市図に属する<sup>2)</sup>。街路が

平面的に都市の骨格を作りだしているのに対して、城壁やいくつかの建築物が側面形で描かれている。

中国において鳥瞰図は方志、すなわち地方誌に掲載される都市図の基本的な表現形式となってきた。施政の参考と地域の賞揚という2つの目的を持つ方志にとって、「ながめる」行為と結びつく鳥瞰図は、最もふさわしい表現方法であったと考えられる。

一枚物の刊行図は、方志の掲載図が必然的に帯びる書籍という図幅の制約から解放される。しかし呉紹伯図がそうであるように、詳細な書き込みを可能にする平面図的表現とともに、鳥瞰図的表現が肝要な部分に用いられているのは、平面図と鳥瞰図を併用することが、中国における伝統的な地図思想であった

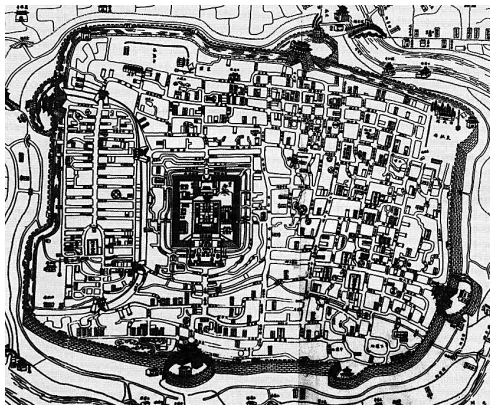


図1 呉紹伯図(城内部分)

『中国古代地図集：城市地図』所載

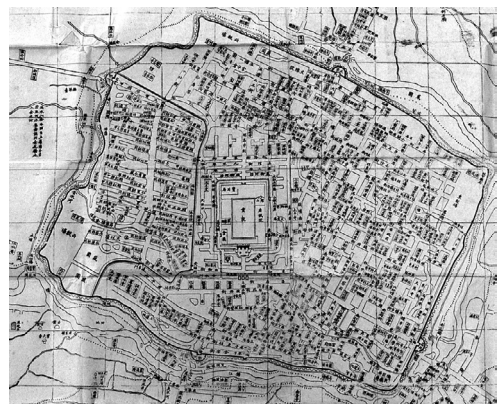


図2 楊維藩図(城内部分)

東北大学附属図書館所蔵

キーワード：都市図，測量，近代，中国

ことを示している<sup>3)</sup>。

これに対して楊維藩の成都図は、そこに描き出された形態の正確さから、近代的な都市図に分類することができる。そう考える理由を成都の都市構造と関連させて説明しよう。

成都はその成立当初から立地が移動していない都市として知られ<sup>4)</sup>、清朝末期において城壁に囲まれた内部は大きく3つの部分からなっていた。成都西部の内城は支配階級の満洲族の居住地で少城と呼ばれ、中央には明の蜀王府を継承した皇城が配されていた。そして残りの部分が市街地を形成している。

楊維藩の成都図は、城壁と市街地の街路を正南北から東に20度ずれた体系として描く一方で、正南北の配置をとる皇城、不定形の少城を相互に独立した形態を持つ地区として明瞭に描き分けることで、歴史的に形成されてきた成都の形態を正確に写しとっているのである。

楊維藩は題記の末尾において刊行の経緯を次のように述べている(図3)。

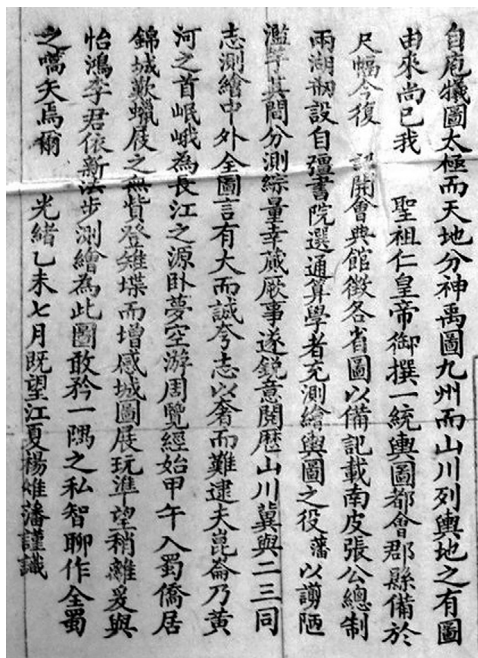


図3 楊維藩図の題記

「城壁に登って都市図をひろげると、その方位が現実と異なっていた。そこで李怡鴻君と新たな方法によって歩測し、この図を描くこととした。敢えてわずかな知恵を誇るようではあるが、四川の嚆矢となるものを作った。」

楊維藩が見たのはどの都市図か、また城壁のどこに登ったのかはわからないが、呉紹伯図を手に南門から市街地を望んだと仮定してみよう。そうすると、ナイトの写真集にあるように<sup>5)</sup>、低層の木造家屋の叢が眼前にひろがるが、皇城の壮麗な建築が起立するのは、手元の地図が示すような南大街の延長上ではなく、街路左手の家屋群の向こうである。こう推測される現場での違和感が、楊維藩にこの地図を作らせたのである。

「嚆矢」という楊維藩の自負が示すように、新旧2枚の成都図に観察される相違は、伝統的な都市図から測量に基づいた正確な都市図への転回と捉えることができる。そしてそれ以後に刊行される成都図は、楊維藩の成都図と同様に正確性を持つことから、この転回は成都図の近代的展開における画期の一つとなっているのである<sup>6)</sup>。その意味で、成都図の歴史において、光緒二十一年は特別な年とすることができよう。

光緒二十一年に生じた伝統から近代への成都図の転回を、ここでは「成都図モデル」と呼ぶこととする。モデルという言葉を使うのは、この転回が成都という都市において発生したユニークな出来事にとどまらないことを意図している。したがって小論の目的は、成都図モデルが他都市の地図の展開に関しても適用可能であるかについて検証を行うことと、その背景を考えることの2点となる。

日本の近代都市図を、内務省作成の五千分之一図、陸地測量部作成の地形図、商工案内図、地籍図、都市計画図、住宅地図、火災保険図、その他の地図という8種の類型から、広汎に渉獵・整理した山田誠は、一般的な市

街図とも呼ぶべき都市図が近代日本において多く作成されたことを明らかにしている<sup>7)</sup>。

また富山と金沢という北陸の2都市の近代都市図を網羅的に検討した山根拓は、官製地図ではなく、民間地図が活発に刊行されていたことを指摘し、中央に平面図を配し、周辺に景観画や説明を置くという構成がその特徴であることを明らかにしている<sup>8)</sup>。

日本の近代都市図を対象とした研究が語るように、近代は都市図が多く作成された時代である。その近代地図への前近代地図からの展開を考えるに当たっては、長谷川孝治が1980年代の英米における研究動向を整理する中で指摘したように、進化論的にこれを扱うことの限界に注意が払われるべきであろう<sup>9)</sup>。

その際、前近代の地図を多面的に考察した青山宏夫が、地図コミュニケーション・システムとして示すように、現実世界と地図の間には地図作製者が介在していることから、地図化のプロセスをめぐる環境的・社会的・技術的なコンテクストにおいて、近代への転回に関する考察は進められなければならない<sup>10)</sup>。

## II. 成都図モデルの検証

平面図と鳥瞰図の混交した伝統的な都市図から、測量に基づいた正確な近代的な都市図への転回が、成都以外の都市を描いた都市図においても観察されるのか、それは成都図と同時期に生じているのか。

これらの問いに全面的な答えを出すほどに、中国における都市図研究は進展していない。それどころか、研究の前提となる都市図そのものの収集・整理が不十分な段階にあると言わざるをえない。しかし幸いなことに、武漢、上海、広州、青島、天津、蘇州、ラサ、杭州、重慶などの個別の都市について都市図集が発行され始めており<sup>11)</sup>、また都市横断的に都市図を集めた地図集が刊行されていることが、この検証作業に一定の可能性を提供している。

中国の都市図を集めた『中国古代地図集：城市地図』に掲載された200葉ほどの都市図から、清朝後期の51葉の地図について、伝統的都市図に属するか、それとも近代的都市図に属するかを判読し、一覧としたものが表1である。判読結果は右端の列に伝統的都市図に属するものを「旧」、近代的都市図に属するものを「新」として示した。

一瞥してわかるように、光緒十年代までの都市図は伝統的都市図に属するものが多く、一方、光緒二十年以降には近代的都市図に属するものが伝統的都市図を数的に圧倒してゆく。この概観だけからも成都図モデルが中国の都市図一般に適用可能なことが推定されるのであるが、さらに個別の都市あるいは都市図のレベルにおいて検証作業を進めてゆくこととする。

まず成都図モデルが適用できる例として、長江中流に位置する武漢の都市図を取り上げよう。『武漢歴史地図集』は宋代の華夷図・禹迹図から20世紀末の衛星写真まで100幅の地図を載せている<sup>12)</sup>。省都である武昌に着目すると、光緒九年の湖北省城内外街道総図は平面図と鳥瞰図を組み合わせた伝統的地図であるが、光緒三十四年の武昌省城最新街道図は等高線も用いられた実測に基づく正確な近代的地図である。

仮説としてのモデルの検証作業としては、適合事例の紹介よりもむしろ反証の解釈が重要であろう。まず光緒六年の上海县城租界全図を取り上げよう。開港から30年あまりがたった上海は黄浦江に沿って县城と租界が南北に連なっていた。上海县城租界全図は縦長の図幅にその姿を正確に写しとった美しい地図である。上海は開港都市として早くから西洋人による測量地図が作られている。『老上海地図』に掲載されているGrand Plan of the Foreign Settlement at Shanghai (1855)は租界の地割と建築を詳細に描き出している<sup>13)</sup>。こうした開港都市について欧米人によって作

表1 都市図の伝統と近代

図名	刊行年	サイズ	体裁	新旧
道光北京内外城全図	(道光二十五年1845)	240×180	彩色絹本	新
Plan de Peking	(1851-61)	71×78	彩色紙本	新
浙江省垣坊巷全図	咸豐九年1859	58×100	墨色紙本	旧
榆林府城図	同治二年1863	173×84.3	彩色絹本	旧
浙江省垣城廂総図	同治三年1864	48×82	墨色紙本	新
福建省会城市全図	(同治三年1864頃)	119×108	彩色紙本	旧
江寧省城図	同治十二年1873	60.5×98	墨色紙本	旧
湖北武漢全図	光緒二年1876	60×40	彩色紙本	旧
湖北漢口鎮街道図	光緒三年1877	171.5×82	墨色紙本	旧
湖北省城街坊図	光緒三年1877	73×65	彩色紙本	旧
上海県城廂租界全図	光緒六年1880	135.2×62.6	彩色紙本	新
重慶府城図	光緒六年1880	—	墨色紙本	旧
劍城図	光緒六年1880	109×172	彩色絵本	旧
南京城図	光緒六年1880	65.8×66.3	墨色紙本	旧
姑蘇城図	光緒九年1883	81×138.7	彩色紙本	旧
湖北省城内外街道総図	光緒九年1883	89.9×128.5	墨色紙本	旧
直隸省城街道全図	光緒十年1884	62×104	彩色紙本	旧
重慶府治全図	光緒十三年1886	85×148.5	墨色紙本	旧
平樂城図	光緒十四年1888	67×138	墨色紙本	旧
蘇州城廂内外全図	(1873-1898)	101×59.3	墨色紙本	旧
重慶府治全図	(1886-1890)	77×145	彩色紙本	旧
營口全図	光緒十六年1890	46×75	彩色紙本	新
広東省城図	(光緒年間1875-1908)	34.5×58.5	彩色紙本	新
浙江省城図	光緒十八年1892	116×66	墨色紙本	新
營口図式	(1887-1909)	92×180	彩色紙本	旧
陝西省城図	光緒十九年1893	58×98.7	—	新
京城内外首善全図	(1890-1902)	61.5×52.2	石印本	旧
上海城市図	光緒二十五年1899	90×58.1	墨色紙本	新
京城詳細地図	光緒二十七年1901	78.5×59	石印本	新
京城各国暫分界址全図	(1900-1904)	63×55	彩色紙本	旧
粵東省城図	光緒二十九年1903	56×31	墨色紙本	新
山西省城全図	光緒三十一年1905	89.2×62.9	彩色紙本	新
長沙城図	光緒三十一年1905	85×130	墨色紙本	新
保定府城図	光緒三十一年1905	88.5×96	墨色紙本	新
上海図	光緒三十二年1906	30.5×50.3	彩色石印	新
河南省城地輿全図	光緒三十三年1907	122×88	墨色紙本	新
景德鎮全図	光緒三十三年1907	—	彩色紙本	新
哈爾濱一帯全図	光緒三十三年1907	56×74.2	墨色紙本	新
廈門城市全図	光緒三十四年1908	71×43.6	彩色紙本	新
紹興府城衢路図	光緒三十四年1908	49×56	彩色紙本	旧
張家口市街図	(光緒末年1908)	113×55	墨色紙本	新
長春商埠地区	光緒三十四年1908	49×62	彩色絵本	新
淮安城市附近図	光緒三十四年1908	46.5×46.5	墨色紙本	新
金陵城内地名全図	光緒三十四年1908	187×160	彩色紙本	新
武昌省城最新街道図	宣統元年1909	57×104	墨色紙本	新
湖北省城内外詳図	宣統元年1909	90×150	墨色紙本	新
桂林省城図	(1909頃)	80.5×135	墨色紙本	新
雲南省城地輿全図	(1909頃)	48×58	彩色紙本	旧
奉天省城巡警区域地区	宣統二年1910	47.4×69	墨色紙本	新
山西省城最新詳細地区	宣統二年1910	59.5×62.5	彩色紙本	新
貴州省城堪輿全図	宣統三年1911	68.5×50.7	彩色絵本	新

『中国古代地図集：城市地図』より作成

注：刊行年の（ ）は編者の推定。サイズはcm。

成された既存の実測地図の存在が近代都市図を早期に上海にもたらしたと考えられる。

つぎに道光二十五年(1845)の北京内外城全図はどう解釈されるのであろうか。北京の都市地図史を考察した朱競梅は、首善全図と称される系統の伝統的都市図に代表されるように、清朝中期から民間の都市図出版が盛んに行われた中で、この北京内外城全図は手描きによる官製地図の系統に属するとする<sup>14)</sup>。

ここで考えるべきは、都市図が民間で作られたものか、官製のものかではない。測量に基づく正確な都市図をつくる地図技術が早くから存在していたことである。

北京については乾隆十五年(1750)に京城全図が作られている。14m四方という巨大な京城全図は、縮尺がおよそ650分の1の正確な測量地図である。この作成には宮廷画家となっていたカスティリオーネ(郎世寧)も参加しており、宣教師がもたらした近代的な測量技術との関連も想定される。しかし、実際には様式雷と呼ばれる中国の伝統的な建築設計図の方法を用いて描かれたことが明らかにされている<sup>15)</sup>。

反証の検討からわかったことは、成都図モデルが近代的な都市図生成のすべてを説明する力をもつものではないこと、すなわち例外事例を有することである。そして測量に基づく都市図が、近代的測量と伝統的測量の2つの技術的背景をもって作成されていたことである。

### Ⅲ. 転回の背景

成都図に観察される、伝統的都市図から近代的都市図への転回が19世紀末を画期として生じたとするのは、他の都市を描いた地図についても、例外はあるものの、おおよそ適用可能であることがわかった。

長江の上流に位置し、四川盆地という閉鎖的世界に立地する成都の特性からしても、この転回が成都図から始まり他都市に伝播し

た、とすることはできないであろう。つまり中国において各地の都市図が同時代性を具えていることを認め、全体的な変化のひとつとして成都図における転回を捉えなければならぬこととなる。

この転回の背景を検討するに際しても、成都図の題記に楊維藩が書き残した言葉が、私たちに示唆を与えてくれる。楊維藩が光緒二十年に四川にやって来て、その翌年に成都図を作成するに至った経緯についてはすでに紹介したが、その前段に関する記載がここでの注目点となる。楊維藩は江夏(現在の武漢)の人で、四川に来る前に武漢で地図測量に従事したことが書かれているのである。

題記には、清朝皇帝は一統輿図(全国図)を作ってきたが、再び詔勅を発し、会典館が開設され省図を徴することになった。湖広総督の張之洞は自強書院を設け、算学に通じた者を選び、輿図の測量と製図を行わせた。楊維藩もそれに加わり、実測と集計の作業にたずさわった。そして志を同じくする者と中国と世界の地図を書くことを思い立った、とある。

楊維藩が武漢で従事したのは、清会典図に関わる地図作成事業であった。清会典図は、清朝の政治と法令制度をまとめた大清会典が再編されるのに際して、列強による植民地化の危機に直面した清朝政府が、領土の確認とその活用を目的として編纂した国家地図集である<sup>16)</sup>。

大清会典は、光緒十二年(1886)到北京に会典館が置かれた時点で、その編集が本格化する。そして光緒十五年に会典館が、各省に対して省・府・県の地図を解説を付けて送付することを命じたことで、清会典図の作成が始まった。続いて光緒十七年に会典館は2回目の通知を発し、地図作成に関わる具体的な規定を発表した。これを受けて、それぞれの省には輿図局が設けられ、人材と器機を集めて測量と製図が進められていった。多くの省

は数年かけて測量と製図を行い、光緒二十年の『奉天輿地総分図』以降、17省が地図集を刊行している。そして光緒二十五年に京師官書局から『清会典図』を含む『大清会典』が刊行された<sup>17)</sup>。

湖北省の清会典図の作成は、光緒十六年に輿図局が設立され、翌年に会典館から章程が到着したことで測量・製図が正式に展開されることとなった<sup>18)</sup>。まず経緯度観測を行う郷紳6名を3つのルートで派遣し、68県の経緯度を計測して基準点を設定する。続いてこの事業のために養成した学生40人あまりを各県に赴かせて、現地で選ばれた数名の助手とともに測量を行わせ、各県の測量・製図を完成させた。それらの照合と編集を行い、解説、一覧表を石版と木版で印刷して冊子として会典館へ送付した。これらに3年を要し、会典館へ送付されたのは、省図1、府図10、州図1、県図68であり、これらを22冊に装丁し、府と州の解説を合わせ32冊の冊子としたものであった。

楊維藩その人については、題記以外の情報を採し得ていないが、各県に派遣され測量に従事した40名ほどの学生の一人であったと考えられる。そして時期的にもこの測量と製図の仕事を終えて、四川に向かったものと考えられる。

#### IV. 技術の伝統と近代

ここで楊維藩が身につけたであろう地図技術について、清会典図とその作成過程から考えてみたい。

光緒十七年に会典館が通達した測量・製図に関する主な規定は、次の8項目である<sup>19)</sup>。

(1) 県以上の行政機関所在地について経緯度を測量すること。(2) 距離は工部营造尺を標準尺度とすること<sup>20)</sup>。(3) 比例は計里画方を用いて表示すること。(4) 会典館の書式に従って1年以内に送付すること。(5) 省ごとに地図は折り畳み装丁により1冊とするこ

と。(6) 沿革や山水についての説明を付すこと。(7) 測量には鳥里、説明には人里を用いること<sup>21)</sup>。(8) 地図記号を用い、上を北、下を南とすること。

この規定で最も注目されるのは、経緯度を用いた近代的地図技術と、計里画方という伝統的地図技術が併用されていることである。

経緯度については、緯度は赤道を0度とし、経度は北京を通る京師子午線からの偏差をとっている。その方法は緯度については太陽の観測による簡易測定が採用されており、経度については月食による測定が行われたとされる<sup>22)</sup>。こうした経緯度の情報を円錐投影することによって作られた清会典図は近代的地図としての条件を備えたものとなっている。

一方、縮尺は伝統的な地図技術である計里画方が用いられている。計里画方とは、図面上に縦横に等間隔の線を引いて、その間隔と一定の実際の距離を対応させて作図することである。3世紀西晋の裴秀が制図六体と呼ばれる地図理論を打ち立てた際に、第一条にすえた分率の法がこの計里画方とされ<sup>23)</sup>、長く中国の地図作成に用いられてきた方法である。

清会典図の作成において、近代的地図技術と伝統的地図技術がともに用いられていたことは、完成した地図にも反映されている。湖北においては、光緒二十七年に地図冊『光緒湖北輿図』（四巻百七十三幅）が、解説である『光緒湖北輿地記』（二十四巻）が光緒二十年に刊行されたのから数年遅れて刊行されている<sup>24)</sup>。地図冊には省輿図と県図が載っているが、それらの地図には計里画方に用いた方格線と経緯線がともに引かれている。

なお清会典図、省ごとに編纂された地図集、さらに各省の輿図局から北京の会典館に提出された地図にも、都市図は含まれていないが、実際の測量は城内すなわち都市部分から始められたとされている<sup>25)</sup>。また輿図局が

作成した都市図として、光緒十九年に刊行された陝西省城図や<sup>26)</sup>、光緒十八年の浙江省城図の再版図が伝えられている<sup>27)</sup>。

## V. 地図思想の転回

楊維藩の四川省城街道図は成都を描いた初めての近代的な都市図である。それは、19世紀末に中国全土で展開された清会典図の編纂という国家的な測量・製図事業を背景として、同時期に各都市の地図が、平面図と鳥瞰図の混交した伝統的なものから、実測に基づく正確な近代的なものへと転回する大きな流れの中にあつた。

応地利明は世界観を表す地図から世界地図への展開を、思想性と芸術性に置かれていた重点が、科学性と実用性へと移動することとして整理している<sup>28)</sup>。とくに科学は近代を根底で支える思想であることから、小論を終えるにあたって、地図の科学性という観点から成都図モデルを再考しておくこととする。

もう一度、楊維藩の成都図を見てみよう。城壁や街路の走向には眼前の都市形態を正確に写しとろうとする意識が強く現れており、以後の成都図に連なる近代的な地図となっている。一方で、図面には縦横に朱色の格子が入れていること、そして図画の端にある「每方鳥道一里」という朱書が示すように、作図には計里画方という方法が用いられており、地図技術の伝統を継承したものでもある。すなわち楊維藩図は、地形図に代表されるような、近代的測量と厳密な製図コードの下で作成される近代都市図ではなく、あくまで伝統から近代への移行期の特徴を持つ地図とみなされる。

清朝においては、18世紀初めの康熙年間に皇輿全覽図が、18世紀半ばの乾隆年間には十三排地図が、それぞれ実測による全国地図として作成されている。これら2つの中国地図は、経緯度測量と三角測量というヨーロッパの近代的地図技術を導入して作られたもの

である。つまり小論が対象としてきた19世紀末から百数十年前の清朝前期の中国には、近代的な地図技術がすでに存在していたことになる。したがってここで考えるべきことは、清朝期を通しての近代的地図技術の伝承の様態となる。

清朝における3回目の全国地図作成事業である清会典図において用いられた地図技術は、前2回に比べてはるかに折衷的であつた。経緯度を観測し基準点を設けていった作業は近代的な地図技術に裏打ちされたものであるが<sup>29)</sup>、同時に製図に際しては計里画方という伝統的な地図技術が用いられていた<sup>30)</sup>。

清朝前期にヨーロッパから導入された近代的な地図技術は、その後の中国においては十分に継承されることなく、地図技術は後退していったとされる<sup>31)</sup>。清朝前期には技術の導入だけでなく、測量から製図に至る地図作成そのものがヨーロッパ人宣教師によって主に担われたことが、地図技術が中国に定着することに負の影響を与えた。また皇輿全覽図、十三排地図ともに宮廷に秘蔵され民間に流布しなかったことも、地図技術継承の阻害要因となった。

清会典図の作成にあたって、この後退した地図技術を克服することが大きな課題となつていた。湖広総督であつた張之洞等の上奏文（光緒十七年十二月二十六日）には、光緒十五年に会典館から命が下つたが、州県には地図に熟達した学者はわずかで、また測量・製図の器機もなく、着手に至らなかつた状況が述べられている<sup>32)</sup>。こうした地図技術をめぐる人材と器機の不足は、奉天、広西、江西、黒竜江、安徽などから提出された期限延期を願う上奏文でも、主な理由として挙げられているものである。

湖北では光緒十七年に輿図局が設けられ、それから器機の購入、人材の育成が進められ、光緒二十一年には省図と県図、および解説が完成している。3年間あまりの測量と製

図の作業を通して、湖北には測量に基づく正確な地図と深く関わった人材が蓄積されることとなった。

清朝前期に行われた全国地図の作成が宣教師に担われたのに対して、清会典図に関する測量と製図は中国人自らが行ったことが、地図技術の継承に関わる重要な相違点として浮かび上がってくる。すなわち成都図モデルが示す、近代的な都市図が多くの都市で同時に作成されてゆくことは、地図技術の上では清会典図の事業を通じた伝播を考慮すべきであることを教える。

孫喆は、清朝前期に作成された実測に基づく近代的な地図が、士大夫を主体とする中国人の地図思想を変化させることがなかったことを指摘している<sup>39)</sup>。それとは対照的に、光緒二十年代における近代的な都市図の叢生は、中国人の地図思想という次元における転換を反映している。楊維藩が成都の城壁で、手元の伝統的な都市図と眼前にひろがる景観との食い違いに感じた違和感こそ、地図思想における科学性への転回を語っていると考えられよう。

(神戸市外国語大学)

#### [注]

- 1) 呉紹伯の四川省城街道図は①『成都市志勘测志』(中国建築工業出版社, 1997, 196頁)および②『中国古代地図集: 城市地図』(鄭錫煌編, 西安地図出版社, 2004, 141頁)などに掲載されている。また楊維藩の四川省城街道図は東北大学附属図書館に所蔵されている。
- 2) 北京の都市図を考察した朱競梅は、中国都市図の伝統的な表現形式の特徴を、平面と立面を合わせ用いることとする。①朱競梅『北京城図史探』, 社会科学文献出版社, 2008, 99~101頁。また中国の伝統的な都市プラン地図は平面と立体形象を組み合わせたものであるとされる。②盧良志編『中国地図学史』, 測絵出版社, 1984, 149頁。
- 3) 現存する最も古い都市図の一つである南宋紹定二年(1229)の平江図もまた、平面図と鳥瞰図の併用により描かれている。
- 4) 姜麗蓉「從清末地図看成都」, 前掲1) ② 319~327頁。
- 5) 路得・那愛徳『消失的天府1910-1913: 美国教師路得・那愛徳撮影作品集』, 広西師範大学出版社, 2009, 176頁。
- 6) 呂蘭の作成した四川省城街道図, あるいは成都の近代を代表する文化人である傅崇榘が刊行した2枚の成都図はいずれも正確な地図である。小島泰雄「成都地図の近代的展開」, 地域と環境 8・9, 2009, 55~64頁。
- 7) 山田誠編『近代日本の大縮尺都市図に関する基礎的研究』, 科研研究成果報告書, 2005, 190頁。
- 8) 山根拓「近代地方都市図の展開—富山・金沢の民間地図—」, 中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界—』, ナカニシヤ出版, 2008, 19~39頁。
- 9) 長谷川孝治「地図史研究の現在—1980年代以降の英米の動向を中心に—」, 人文地理 45-2, 1993, 40~61頁。
- 10) 青山宏夫『前近代地図の空間と知』, 校倉書房, 2007, 426頁。
- 11) 既見の都市図集は以下の通り。①武漢歴史地図集編纂委員会編『武漢歴史地図集』, 中国地図出版社, 1998, 143頁。②張偉等編『老上海地図』, 上海画報出版社, 2001, 143頁。③青島市檔案館編『青島地図通鑑』, 山東省地図出版社, 2002, 125頁。④中国第一歴史檔案館等編『広州歴史地図精粹』, 中国大百科全書出版社, 2003, 129頁。⑤天津市規劃和国土資源局編『天津城市歴史地図集』, 天津古籍出版社, 2004, 115頁。⑥張英霖編『蘇州古城地図』, 古吳軒出版社, 2004, 34頁・20幅。⑦Kund Larsen等著・李鵠等編『拉薩歴史城市地図集—伝統西藏建築与城市景観—』, 中国工業建築出版社, 2005, 180頁。⑧杭州市檔案館編『杭州古旧地図集』, 浙江古籍出版社, 2006, 301頁。⑨李林昉・雷昌徳編『老地図』, 重慶出版社, 2007, 173頁。



- 12) 前掲11) ①。
- 13) 前掲11) ②36～37頁。
- 14) 前掲2) ①92～109頁。
- 15) 前掲2) ①69～82頁。様式雷は、清朝初期に宮廷建築師となった雷発達とその一族が宮殿や庭園の設計に用いた方式を指す。100分の1あるいは200分の1の紙製模型を作成する過程で多くの図面が描かれ、それらが様式雷図と総称される。
- 16) 前掲2) ②191～199頁。
- 17) 中国測絵史編輯委員会『中国測絵史 第一卷・第二卷』、測絵出版社、2002、477～480頁。
- 18) 武漢市勘測院編『武漢測絵志』、武漢市勘測院、1990、52～54頁、141頁。
- 19) 前掲注17) 464頁。
- 20) 康熙帝により規定された長さの統一尺度。地球の経線の1度を200里と定め、1里を1800尺とした。营造尺の1尺は0.317mとなる。
- 21) 鳥里とは水平直線距離、人里とは路線距離を指す。
- 22) 前掲17) 468頁。ただし清会典図に際しての経度測量については、時計を用いた計測や距離と方位から推計する方法なども併用された可能性を考慮する必要がある。
- 23) 金応春・丘富科編『中国地図史話』、科学出版社、1984、68～69頁。
- 24) 復刻が次の叢書に収められている。『清代地図彙編（二編）』、西安地図出版社、2005、344頁。
- 25) 前掲17) 478～479頁。
- 26) 曹婉如等編『中国古代地図集：清代』、文物出版社、1997、第201図。
- 27) 前掲11) ⑧160～161頁。再版図は宣統二年（1910）の刊行。
- 28) 応地利明『「世界地図」の誕生』日本経済新聞出版社、2007、278頁。
- 29) 清会典図が近代的地図技術を用いることに深く関与した人物として鄒代鈞が挙げられる。張平「鄒代鈞与中国近代地理学的萌芽」、自然科学史研究10-1、1991、81～90頁。
- 30) 清会典図は高度という近代地図に必須の情報も欠いている。山地は湖北省ではケバ式に準じた表現が用いられるが、江蘇省では伝統的な「筆架式」とよばれる記号表現が用いられる。
- 31) 前掲2) ②191頁。
- 32) 中国第一歴史檔案館「光緒朝各省絵呈《会典・輿図》史料」、歴史檔案2003-2、2003、39～40頁。
- 33) 孫喆『康雍乾時期輿図繪制与疆域形成研究』、中国人民大学出版社、2003、244～271頁。